

今月9日、私は現田茂夫指揮、京都市交響楽団の定期演奏会で上演されるブラームス作曲の「ドイツレクイエム」を聴くため、京都にいた。レクイエムとは、死者の安息を神に願う典礼音楽である。

70年前のこの日、長崎に原子爆弾が投下された。実は、京都は当初原爆の投下目的都市の一つであったともいわれる。その京都で、戦後70年の節目にレクイエムが演奏されたのだ。

第二次世界大戦で大火を免れた真夏の京都は、想像以上に暑かった。その中を多くの外国人が汗いっばいに観光を楽しんでいる。私はうれしくなった。

そして、酷暑の京都だからこそ、本来の日本人のものの考え方、暮らし方に改めて気づかされた。平安時代から続く祇園祭に始まり、川床や打ち水、食事や和菓子、五山の

文化の伝承と「京のレクイエム」



送り火など数々の夏の風物詩。生活の隅々に至るまで、自然と一体となって育まれた、日本文化そのものがあつた。

文化は人類が創り出してきた有形無形の宝物で、世代を通じて伝承されていくものだ。

そして、平和とは、生命が祖先とつながり、その文化が伝承され、育まれる世界だ。これからも未来の子供たちが、このかけがえのない文化を受け継いでゆける、そして、互いに交流できる世界であってほしい。

1869年にドイツ・ライプツィヒで全曲初演されたこの作品が時代を超えて日本の古都

で演奏されることを、ブラームスも想像できなかつたらう。ドイツ愛国主義者の一面もあつたブラームスは、この作品にドイツ語版聖書に基づいた歌詞を用いて「ドイツレクイエム」と名付けたが、後に「ドイツ」を取って「人間のレクイエム」と置き換えてもよい」と述べた。

私が京都で聴いたレクイエムは、まさに国も言語も宗教も超えて、京都の人々が奏でた人類の平和の祈りであり、感慨深い演奏であつた。

(さとう・しのぶ＝声楽家)

—毎月第3金曜日掲載

